

日中韓シンポジウムあれこれ



佐藤 博

日中韓（CJK）分析研究交流会シンポジウムは、2002年にガスクロマトグラフィー研究懇談会（以下GC懇）の40周年記念事業として、東京都立大学から中国科学院(当時)に帰国した林 金明教授と保母敏行都立大学名誉教授らの尽力で、帰国留学生を中心として北京で日中環境分析化学研究会を開催したことに端を発する。

その後2003年に韓国のGCグループとの日韓シンポジウムがソウルで開催された際に日中韓3カ国での開催が決まり、翌年2004年に、第1回CJKシンポジウムが北京で開催されスタートした。

このように2004年より各研究懇談会が協力し、研究交流と懇親を深めるため、中国に帰国した留学生や日本にゆかりの深い韓国の研究者を中心にして、中国→日本→中国→韓国→中国→日本の順序で毎年開催し、GC懇が事務局（前田恒昭委員長）を務めてきた。研究会を通じて日本との交流、共同研究や留学生の派遣を考えている中韓の研究者等と緊密な連絡を取っている。

日本開催は、2005年・2009年（幕張メッセ）、2013年（九州大学、長崎国際大学：ASIANALYSISと同時開催）だった。このうち前2回は、分析展併催のJAI-MAコンファレンスにおいて本シンポジウム（中村 洋大会長）が開催された。2013年は、ASIANALYSIS VIIの特別シンポジウムとして今坂藤太郎大会長の尽力で、初めて地方での開催となった。また、第10回という記念すべき大会でもあり、記念写真集（2004-2013 CJK）を作成して関係者に配布し大変喜ばれたのは嬉しかった。日本での開催で、空気が綺麗であると中韓の参加者に言われるのは、日本人として非常に誇らしい。

研究交流を通じて中国・韓国の研究者や学生の受け入れや訪問などが活発に行われ、分析化学の分野での隣国の情勢や研究への興味等様々な刺激を受けて研究活動が活性化したのではないだろうか。実際に、清華大学、廈門大学、武漢大学、東北大学など多くの大学との研究交流が行われている。

このような背景で毎年100名程度の参加を得て14年が経過し、研究分野の交流の幅も広がってきたと自負している。

昨年中国^{ふいざん}武夷山で開催された第13回CJKシンポジウムから本学会本部主催となり、新たなスタートを切った。

その際に、研究交流の主旨を変えず、当面3カ国での開催を維持し、持ち回りのローテーションも維持することが確認された。研究発表の機会を通じて研究者や学生の交流をさらに促進し、日中韓の分析化学研究の発展に寄与することを切に願っている。これまでの開催報告は学会誌ぶんせきに記載されているので、御一読いただければ幸いである。

本年は4年に一度の日本開催（内山一美実行委員長）であり、9月9日、10日と第66年会に併せてAsia/CJKシンポジウムとして開催されるので多くの学会員の参加を期待したい。

〔Hiroshi SATO, 長崎国際大学薬学部, 日本分析化学会 GC 懇, 九州支部幹事〕